

# 在華紡の居住環境について

## — 上海の事例 —

大里 浩秋 / 冨井 正憲

### はじめに

本論文は、明治末から昭和20年の第二次世界大戦敗北まで中国に進出、経営された日本紡績工場すなわち「在華紡」を対象として、それが置かれた都市の空間形成の過程を解明することを目的としている。

在華紡の存在は日本の経済動向に重大な影響をもたらす一方、中国社会にも相応の影響を与えて、日本人がそこから撤退したあとも、工場や住居がそのまま利用されて現在に至っているものもあり最近になって廃止され壊されたものもある。在華紡で働いた日本人、中国人の生活空間に注目することは、それが置かれた都市（その大部分に当時、租界あるいはそれに類する外国人の居住区が存在した）の居住環境の一端を明らかにすることにつながり、さらには戦後の都市空間の形成過程を考察することにもつながって、日本はもちろん、中国および東アジアの住宅地形成の歴史を通観するうえでも参考になる視点を得ることができるのではないかと考えられる。そこで本論文ではこうした問題関心に基づき、具体的には上海の事例に絞り、そこでの日本の紡績工場が建設された当時の居住環境の実態、工場地帯の立地、内外綿のまちづくり、日本人社宅、中国人労働者社宅、日本人と中国人の併存社宅などを主に取り上げて、その分析解明を試みる。

そのための基礎作業としては、計画建設時の状態を知るために当時の地図や設計図を入手し、現地調査をして復元図を作成し、併せて、当時の生活環境を知るために文献資料、絵葉書、写真等の収集を行い、かつ関係者へのヒヤリングを行うことにした。とくに現地調査は規制が厳しいために中国側の研究

機関および歴史、建築分野の研究者の協力を得、彼らと成果を共有するよう心がけた。実際の調査は、2006年3月と8月の2回実施した。1回目は予備調査で、内外綿、公大紡績、裕豊紡績の社宅の現存を確認し、上海市档案馆で関係資料の存在を確認した。2回目は前記3紡績会社の日本人社宅群に加えて中国人労働者社宅の現況調査を行い現在の住人へのヒヤリング調査をし、併せて文献の収集、現地研究者との意見交換を行った。

本論文に関連する先行研究としては、戦前には、佐藤武夫、武基雄が1942、43年に『建築学会論文集』に発表した「近代支那住宅散見」、「中支に於ける邦人住宅事情」、「北支に於ける邦人住宅の実例」、「北支に於ける邦人住宅の現状」の4編がある。とくに「近代支那住宅散見」は、近代中国における新都市の庶民住宅を概観し、その中で「<sup>リーロン</sup>里弄住宅」について具体的事例を上げて詳細に論じており、また「中支に於ける邦人住宅事情」は、当時の上海における日本人の住宅の実態について代表的な事例に基づいて報告したもので、参考にすべき内容が多い。ところが、戦後の在華紡関係の研究は、経営実態、労使関係、他の産業との関係などの分野においては多くの研究がなされてきたものの、工場で働く日本人、中国人の居住環境について詳しく検討している論文は最近発表された芦沢知絵「在華紡の福利施設—内外綿上海工場の事例を手がかりとして」（『中国研究論叢』第7号、2007年8月）のみである。しかし、この論文は歴史研究の立場から論じたものであり、同様のテーマを建築研究の立場で言及したものはこれまでにない。

したがって本論文は、その点を念頭に置いて論じようとするものであるが、その前に上海を中心とし

た在華紡の歴史を概観することから始める。

## I 在華紡の歴史

「在華邦人紡績業は日本紡績業資本及技術の大陸進駐形態である」とは、『内外綿業年鑑』昭和17(1942)年版に書かれた一節であるが、以下この日本綿業倶楽部が昭和2年度から発行してその最後になったと思しき昭和17年版『年鑑』の記述を主とし他の資料を従として参照しつつ、中国における紡績業の発展とそこへの日本紡績業の「進駐」ぶりについて概観する。なお、『年鑑』では昭和17年までの動きを創業期、漸進期、発展期、整頓期の4段階に分けているので、今はその分け方に従うことにする。

### (1) 創業期 (1890～1904)

中国における綿紡績の歴史は古いけれども、外国から機械を輸入して紡績工場を経営したのは19世紀後半の洋務運動が推進されてからのことで、清朝の実力者李鴻章は外国製綿布輸入が年々巨額に上ることに鑑み、「之が防遏策として」中国内に紡績業を扶植しようとして上海に織布局と称する紡績工場を創設し、その後武昌、無錫などにも工場を設立した。中国紡績業発展の先駆となる動きであるが、やや遅れて外国資本が流入して、アメリカ、イギリス、ドイツが相次いで中国各地に紡績工場を設立したため、中国は「幼稚なる紡績業を保護する暇もなく、直ちに豊富なる資本と優秀なる技術とを擁する外国人経営工場の製品と競争せざるを得なくなった」。そして、この競争において中国人の紡績業は常に不利な結果をもたらしたが、他方で外国人経営工場の好成績に刺激されて杭州、蘇州、南通などにも工場が建てられた。しかし中国の綿産額がこれに応じて増加せず、その結果、原綿市価の暴騰と労働者の不足を招き、さらには金融機関の不整備や交通の不便等の障害があつて、その後中国人、外国人いずれの工場も振るわなくなった。

なお、この中国における紡績業の創業時期に重なって外国資本による中国での工場建設が認められた

のは、日清戦争に勝利した日本が下関条約で中国開港場での工場建設の権利を獲得したことによるが、当の日本はそのころ「近代工業移植の準備時代なりし為め」中国に進出する余裕がなく、他国の進出を横目で眺めているしかなかった。中国より20年早く幕末から紡織機の輸入を試みて近代的生産に脱皮しつつあった日本としては、中国進出の余裕がないというだけでなく、中国で生産するよりも日本で生産したものを中国に輸出する方が得策であるとの考<sup>(2)</sup>えもあった。ただし日本人の中に中国での紡績工場経営の動きが全くなかったわけではなく、三井洋行が1902年に上海で中国人が経営する興泰紗廠を買収してその名前のままで経営を続け、08年上海紡績株式会社を創立した際、その工場を上海紡績株式会社第一工場と改名した<sup>(3)</sup>。

### (2) 漸進期 (1905～1914)

日露戦争が終わった1905年頃から中国経済界も新局面を迎え、金融機関や交通機関も整備され、綿花の栽培や労働者も増加して再び紡績業が活気を呈することになった。この10年間は「紡績業の平和に進歩した時代」であり、この間に日本人の紡績工場が進出して「英人紡績との角逐漸く熾烈となり」、イギリス人、中国人の紡績と対抗して「三者鼎立時代を現出した」。具体的には、1905年に三井洋行が上海の中国人経営の大純紗廠を借りさらに翌年にはそれを買収して生産を行い、のちに上海紡績第二工場と改名した。また、内外綿株式会社は1909年に上海共同租界内小沙渡地区蘇州河畔に、翌年にはさらにその近くの宜昌路に土地を購入して工場を建設して、1911年から生産を開始した。これが内外綿第三工場であり、日本が中国に独自に紡績工場を建設した最初であった。内外綿はさらに13年に第四工場、14年には第五工場をいずれも上記第三工場の近くに開設した。

### (3) 発展期 (1915～1921)

第一次世界大戦が1914年に勃発するや、中国におけるドイツ資本が一斉退場を余儀なくされ、さらに世界綿製品市場に絶大な勢力を誇っていた英国品

の供給減は世界綿製品市価の高騰を招き、そのため中国輸入の綿製品市価も高騰して中国綿業の勃興に大いに刺激を与えることになった。その結果1916年から21年までの短期間に新たに開設された紡績工場は中国人、日本人経営の両方で計62に上っており、とくに21年だけで31を数えることからこの年は中国「綿業発達史中最も光栄の年」といわれると『年鑑』は記している。また、この時期外国人が経営する工場は「認むべき進展の跡なく」経営難に苦しみ、アメリカ人が経営する工場がまず倒れ次にドイツ人の工場が退場し、残るイギリス人も工場を新設する力はなく、ただ日本人の工場のみは「欧州大戦により迅速且つ健全なる発展を遂げ」、中国人紡績も発達が著しいとはいえ「資本に於て経営法に於て到底日本の敵ではなく」しだいに中国人の勢いを圧倒するに至り、「終に在支紡績の覇権を掌握するに至った」と記している。日本紡績業の当事者の主観および自負を文章化すればその通りに違いないが、冷静に歴史を振り返ろうとする側から見れば、この時期が第一次大戦で日英同盟の責任を果たすという名目で山東半島に出兵してドイツ軍を追い出してからも青島に居座り、さらに二十一カ条要求を中国に突きつけて領土的野心を露わにして中国人の反発を買って五四運動を惹起する時期に重なることを忘れるべきではないだろう。

この時期に設置した日本の紡績工場についてみると、日本の軍政署を置いたばかりの青島に内外綿が工場を建設して、1917年から第六工場として操業を開始した。内外綿はさらに18年には上海に第七、第八工場を設置、同じく18年に中国人が経営していた上海の裕源紗廠を買収して第九工場とした。大日本紡績は1919年に青島に大康紗廠を設置し21年から操業を始めた。鐘淵紡績は1919年に上海に創る工場の用地交渉を開始、翌年にそのための土地を確保して建設に取り掛かり、公大紗廠の名で22年から操業を始めた。鐘淵はまた21年に青島に工場用地を確保し、22年から公大第五廠として操業を始め、25年には上海の中国人経営の老公茂紗廠を買収して公大第二廠を名乗り、先の公大紗廠を公大第一廠に改称した。他にも、同時期から24、5年ま

でかけて上海には豊田紡績廠、同興紡績第二工場、大日本紡績の大康紗廠、東華紡績第一、第二、第三工場および東洋紡績上海工場などができた。そのうちの東洋紡績上海工場は、のち1929年に本社から分離させて独立会社となり、裕豊紡績会社工場となった。また青島には上述の工場のほかに、富士紡績の富士紗廠、長崎紡績の宝来紗廠、日清紡績の隆興紗廠が操業を開始した。

#### (4) 整頓期 (1922～1937)

中国紡績業の工場新設の機運はこの時期にも見られるものの、1929年以降になると世界恐慌のあおりで「破滅的打撃を受け」「弱体会社の解消、資本系統の整備等」の整頓工作が進められた。しかし日本紡績業の場合は、中国政府が綿製品の関税を引き上げたのが一因となって中国市場確保のためには中国に工場を設けるのが有利としたことから、「新設工場が再び激増するに至った」。この時期は、日本と中国の外交関係は次第に緊迫の度を増し、ついに日本は1931年に満州事変を起こして「満洲国」をでっちあげたばかりか、軍事力を背景にしてさらに華北へと影響力を増さんと画策する時期にあっていた。そこでこの時期の紡績業の中国進出は、「北支」具体的には天津と青島が目指されたのである。天津で工場を建設しあるいは中国人の工場を買収して操業を開始したのは、鐘淵公大、上海紡績、裕豊紡績、天津紡績、裕大紡績、唐山華新紡績、双喜紡績、岸和田紡績などで、一方青島には、豊田紡績、上海紡績、同興紡績が工場を開いた。他に上海でも新たに開設された工場は多いがここでは省略する。

なおこの時期、中国人労働者の日本人経営者に対する待遇改善要求運動が頻発した。日本から中国にやってきた経営者たちは労働者が定着して働くよう競って待遇を良くしようとし、給料を中国人の工場はもちろん、イギリス人、アメリカ人の工場よりも高くしただけでなく、食堂、診療所、宿舎などを設け、子弟のための学校を開いたりしたが、中国人の生活習慣を無視した強引な管理体制をとったことが労働者の反発を招いて、多くの工場で大小の労働争議が起こったのである。そして、中国共産党指導下

で起こした大規模な運動は、日本を含む諸列強が当時中国各地に持っていた様々な権益への反対の意思を込めた民族主義的な運動に拡大する様相をしばしば呈することになった。その典型例が1925年春に起こった内外綿争議であり、その延長で起こった五・三〇事件である。また、日本が軍事行動を起こすたびにそれへの反対の意思が示され、とくに満州事変のあとに起こった上海事変では、上海の日本紡績工場は前後3カ月間閉鎖休業に追い込まれたのである。

以上は、『内外綿業年鑑』を主に他の資料を従にし、さらに筆者のコメントを加えながらまとめた1937年までの中国綿業発展の概観である。「……」の部分は、断らない限りは『年鑑』からの引用である。限られた資料しか使っていないことからくる表現上の偏りは免れていないであろうことをお断りする。以下も、同じ『年鑑』を参照し他の資料を援用しつつ、その後の経過を(5)として書き継ぐことにする。引用は、上記要領に同じ。

#### (5) 在華紡独占期(1937～1945)

1937年7月に日中戦争が勃発してそれまでの中国綿業を取り巻く状況は一変した。日本人紡績工場は「長期抗戦を叫ぶ蔣政権が、日本の経済力を減損すべく最も手近かにあり、最も効果的な対象としたため」中国軍によって爆破され大きな打撃を受けた。まず天津は7月末に騒乱状態になって工場は運転中止に追い込まれ、一部は襲撃を受けたが軽微な被害で終わり、8月初めには操業を再開した。上海の場合は8月13日からの戦闘で工場閉鎖となり、一部の工場は爆弾攻撃の被害に遭い、また一部工場は機械が運び出され、放火されるなどの被害を受けた。最も被害が大きかったのは青島の工場で、在留邦人が8月末に引き揚げた後、12月18日夜「蔣政権の指令によって」全工場が爆破焼失された。その後、38年7月には天津の工場は100%、上海では80%の操業までに復興し、青島の場合は遅れて39年4月には各工場ともに全部復興して操業を再開した。

他方中国人の紡績工場も戦闘による多大な被害に

遭い(『年鑑』の記載によれば、戦火で失った紡績機械は日中戦争前の2割弱で日本側被害3割7分より少ないとする)、「戦禍により灰燼に帰せるものの外破壊を免れた工場は日本軍により占拠せられ、其後日本人の手により委任経営」されたものが多かった。さらに、イギリス人、アメリカ人経営の紡績工場については、1941年12月8日太平洋戦争勃発と同時に軍が租界内に進駐して敵性工場として接收し、42年1月9日を以て操業停止閉鎖を命じ、そのうちの一部の工場は在華日本紡績同業会上海支部の管理下で操業が継続された。「斯くの如く邦人紡績業は速かに事変前の状態に復帰せんとし更に事変に依って休業したる」中国人紡績工場の経営を受け継ぐことで、中国紡績業における「其の支配的地位を一層高めんと為しつつある」と『年鑑』は記し、さらに「大東亜戦下の今日大東亜を一体としての総合的繊維自給体制の確立にせまられ、そのためには」中国大陆における「綿花の増産並びに繊維工業の発展に俟つところ大なるものあり……在華邦人紡績業者はその使命の最重大なる事を感じ一層団結して、国家の要請に応え綿業報国の誠を致さんものと懸命の努力をしつつある」とも記している。

『年鑑』が上のごとき決意を書いてから3年後、1945年8月に日本は敗戦を迎えて、紡績関係者は身の回りのわずかなものを携えて帰国することになり、工場の一切の設備は国民党政府当局によって接收され、今度は中国の国営事業として受け継がれていった。その際一部の日本人技術者が留め置かれて技術指導にあたったが、やがて中国人のみで運営されることになり、中国共産党政権に移ってからも引き続き国家の重要産業として機能して、日本人が残した工場設備が活用され、宿泊施設も使われてきたのである。しかし1980年代から始まった改革開放政策によって赤字国営企業の整理統合が行われ、紡績業も90年代からその対象とされて廃業が相次いだ。その動きに伴って工場が壊され、そのあとに大型マンション群が建てられ、老朽化した宿舎も壊されて別の建物に生まれ変わって、一部残る工場や宿舎が今後たどる運命が気になる現況である。

最後に、上に述べたような日本人紡績業の中国への大量進出がどうしてなされ、またそれがどうして可能であったのかについて、やはり『年鑑』を主な資料としてまとめることにする。在華紡がどうして急速に拡大発展したかと言えば、「其の最大原因が生産費の低廉（尤も之は労働能率の点より幾分相殺される）と綿布を消費する四億の人口より生ずる購買力にあることは勿論」だった。さらには前述したことだが、第一次世界大戦後の中国の関税自主運動によって関税の増徴が見通されたことから、日本で作って中国に輸出するよりも中国現地で作る方が有利であると考えたことも原因の一つであった。また、『年鑑』では触れていないが、1916年に日本では「工場法」が施行されて、それまでのように12歳未満の児童を雇用できず、女性労働者や少年労働者を夜間に働かせることができず、12時間の労働時間を超えることができなくなったことから、そのような法律がない中国に目をつけたという事情もあった。<sup>(4)</sup>『年鑑』は他にも、中国紡績業が抱える外在的、内在的な条件を箇条書きにして、それに比べて日本がいろいろと有利な条件を持っており、とりわけ日本側には優秀な技術と経営があるから中国との競争に勝って今日の発展を見たのだと言う。そこで『年鑑』が羅列した中国紡績業が抱える外在的、内在的な条件を見ておく。

外在的条件——①商品及資本による外国資本主義圧迫、②政治的社会的不安定と封建的租税の過徴、③国内市場の不統一及び内外市場の委縮或は狭小、④重工業の未発達から来る紡織機自給不能、⑤奴隷的、農奴的性質を有する賃金労働の根強さ

内在的条件——①管理の拙劣、②労働及機械能率の低位、③流動資本の欠乏、④高利借入金過多

日本がこのようなマイナスの条件とどれだけ無縁であったかの検討は今ほ措くとして、中国がここに指摘されているようなたくさん問題点を抱えていたことは事実であり、それが在華紡の中国への進出、拡大に有利に働いたことも確かなことであろう。しかし在華紡の中国への進出と拡大は多くの場合、日本の中国に対する軍事行動を伴っての権益獲得、あるいはその拡張がなされた後のことであり、つま

りは国威をかざして経済的進出を図ったという側面が強く、したがって一時的で不安定な成功を収めたにすぎなかったことは記憶に留めるべき点である。山東出兵、青島駐屯、二十一カ条要求の後の青島、上海への進出しかり、満州事変と華北への軍事圧力の後の天津への進出しかりであり、その十数年後には敗戦、撤退を余儀なくされたのである。

## Ⅱ 居住環境の事例調査

ここでは在華紡の上海における工場地帯の立地、内外綿のまちづくり、中国人と日本人の社宅について具体的な事例をとりあげ、居住環境の分析を行う。

### (1) 紡績工場の立地について

(データシート1～2 (p.33))

租界時代の上海は、①共同租界を中心とする市街中央部、②高級住宅街として発展したフランス租界の地域、③蘇州河南側の普陀地区、④南の古くから中国人が住む旧鼎城のオールドタウンとしての市区、それから蘇州河北側の⑤上海駅を含む北閘一帯とその後ろの農業地域、⑥日本人が多く住む虹口地区、⑦虹口の東に隣接する楊樹浦、⑧東北部の大上海新都市地域、⑨黄浦江対岸の浦東地区にゾーニングされる。この9つの区域のうち戦前の工業地帯として開発発展した地域が、虹口の東に隣接する楊樹浦と、蘇州河南側の普陀地区である。2地域とも河川による水運利用が大きな特徴を示すが、両者には大きな相違がある。楊樹浦地区は黄浦江沿岸の埠頭施設やインフラ施設に混在して綿紡績工場が配置されている。これに対して普陀地区の蘇州河沿岸一帯は綿紡績工場群で占められている。

また1937年9月1日発行の『内外綿株式会社五十年史』に添付されている「上海略図（東西紡績地帯）」から、上記2地域における日本人紡績工場、英人紡績工場、中国人紡績工場の会社名、地区数、工場数を詳細に読み取ると以下の通りである。

▽東地域 楊樹浦地区（各会社の地区数、工場数がそれぞれ各1は表示を省略）、

日本人紡績工場：上海5地区6工場、公大2地区2

工場、裕豊2地区5工場、東華1地区2工場、大康、同興、

英人紡績工場：怡和2地区2工場、博徳運

中国人紡績工場：申新3地区3工場、恒豊1地区3工場、仁徳、振華、緯通、経緯、

▽西地域 普陀地区

日本人紡績工場：内外綿6地区9工場、公大2地区2工場、日華2地区3工場、喜和1地区3工場、豊田1地区2工場、同興、

英人紡績工場：怡和、

中国人紡績工場：申新3地区3工場、新裕2地区2工場、鴻章、永安、統益、大豊、鼎鑫、崇信、振泰、協豊、民生

▽浦東地域

日本人紡績工場：日華紡績1地区2工場

英人紡績工場：無

中国人紡績工場：無

全体の紡績会社の数は29社である。その国別内訳は日本10社、英国2社、中国17社である。1936年度末の資料によれば上海には邦人の紡績会社が9社、華人会社が21社の報告が見られる。<sup>(5)</sup>3地域別にみると、東地域に15社・24地区・31工場、その国別内訳は日本6社・12地区・17工場、英国は2社・3地区・3工場、中国は7社・9地区・11工場である。また、西地区は18社・28地区・35工場、その内訳は日本6社・13地区・20工場、英国は1社・1地区・1工場、中国は11社・14地区・14工場である。この他に浦東地区に日本1社1地区1工場がある。東西地域の会社数、地区数、工場数を比較すると10%ほど西地域が多い。これは中国民族紡会社数の東西の差がそのまま表れている。東で最も地区と工場の多い上海紡績は西地区にはない。また、西で最も地区と工場数の多い内外綿は東地区にはない。東西2地域にわたって工場を持つ会社は日本の公大、同興、英国の怡和、中国の申新の計4社である。他には西と浦東2地域にわたって工場を持つ日本の会社が1社である。

地区と工場の数が多い会社は東地区では上海紡績の5地区6工場、西地区では内外綿の6地区9工場、いずれも各地区の25%を占める。東西両地区を合

わせた場合には中国民族紡最大の申新が6地区6工場である。

紡績工場は敷地が沿岸に位置することが重要であるが、東地区では24地区のうち約半数の9地区が黄浦江に沿っている。9地区のうちの5地区が日本の会社である。また西地域においては28地区のうち3分の2の19地区が蘇州河に沿っている。19地区のうちの10区が日本、1地区が英国、残りの8区が中国である。中国の8地区のうちの4地区は河を越えた北側対岸に位置する。河に接する工場敷地が西地域に比較して東地区が半分以下の理由は黄浦江沿岸が埠頭をはじめ、水道、電気施設といった都市基盤施設と競合して空地がないためである。

## (2) 内外綿のまちづくり

(データシート3〈p.34～35〉、4〈p.36〉)

紡績工場の立地で明らかにしたように、上海において最も地区と工場数の多い紡績会社は、西の蘇州河普陀地区一帯に展開する内外綿株式会社である。その数はすでにみてきたように地区が6つ、工場が9つである。ここではその内外綿の工場群を取り上げ、全体の居住環境について検討してみたい。

1937年発行の『内外綿株式会社五十年史』に添付されている「上海支店工場社宅分布図」と「当社各支店工場敷地及建物坪数」の表を併せて検討すると、9つの工場及び付属施設群は租界の中心から少し離れた共同租界の北端の蘇州河一帯に集中している。東西約1.5km、南北約1.3kmのヒトデ形をした普陀地区の面積はおおよそ60万坪ほどである。この普陀地区に内外綿が最初に進出したのは1909年(明治42年)蘇州河に沿う土地9615坪を入手したときからである。次いで翌年宜昌路に沿う土地2600余坪を購入し、工場及び同工場の事務所、倉庫、寄宿舎その他付属建物一切の建築工事を上海在住の建築家平野勇造に請負わせ、工場の建設がスタートした。<sup>(6)</sup>その後1911年から1931年の20年間に建設された工場は9つを数える。1937年における内外綿上海支店の地所坪数は184903.00坪、工場坪数が45103.80坪、その広さは普陀地区のおよそ3分の1を占める。

ここに、日本人社員380名、中国人の工員12532

名（男工員3736名、女工員8796名）が雇用されていたのである。<sup>(7)</sup>

街路はおおむね格子状の体系をとり、南北、東西にそれぞれ基幹道路3本ずつが配置されているが、未完のため十字路が少なく、T字路が多く残っている。街区構造はおおかた矩形をなしているが、その大きさは工場敷地を基本にしているために各街区は大きく、住宅地スケールの小街区は全くない。

地区の用途構成を社宅分布図から検討すると、まず工場の敷地は水運を最優先することから、内外綿の第一・二工場地域、第三・四工場地域、第五・六・七工場地域、第九工場地域の4つの地区は直接蘇州河に接する。第八工場地域も河に近接して位置する。他の紡績会社の工場も同様に水際を占めているために、蘇州河沿い一帯は工場が専有している。

河に沿った工場敷地の背後に社宅、公園、病院、学校、警察署、消防署、倶楽部、記念時計塔、その他の社有土地が配されている。また、内外綿本部は工場に隣接することなく、中央地区に近い場所に孤立して位置する。

内外綿の付属施設の建坪は8992.55坪、社宅その他設備が21845.77坪、2つをあわせると総建坪は75942.12坪となる。<sup>(8)</sup>

こうした広い地域の建設計画方針は、1920年本社通達の建設計画案からうかがうことができる。計画案によれば「現各工場付近の地所にて、工場通勤に至極便利なる場所を選定し（蘇州河対岸居留地外にても可なり）、一大村落を建設し、当社工場工手に限り貸与する事に致度候。家の軒数は将来を見込み五十軒（平屋にて）、二階家なればその半数建設すると仮定して、地代建築費予算を御提出被下度候。夫れに依りて其の金額を支出する様、株主に承諾致さしむべく候。名義は居留地外なれば支那人名義と致し度く、之れは相当なる英米人支那人（仁記路家主または裕源持主等の如き）の有力者に御相談被下度候。<sup>(9)</sup>」とある。社宅の立地は工場通勤に便利な現在の工場の付近を選定し、一つの大きな村落を建設することを計画の目標としていたのである。先の社宅分布図を詳細に検討すると、日本人社員社宅と中国人工人社宅は分かれ、それぞれが独立しながら点

在している。その内容は「特に低額の維持費を以て貸与し、電燈、ガス、水道其の他衛生設備は無論、是等修理一切は当社の手を以て行い、其の使用料は格別低廉となし<sup>(10)</sup>」ていた。社員住宅の外に、独身者に対しては合宿所の設けがあった。

日本人の社宅は第三・四工場地域に隣接する内外綿社宅（現宜昌路社宅）と内外綿本部地域に併置された2カ所からなる。建物の配置はゆったりとした棟間隔を確保している。

日本人社宅の延坪数が7891.55坪、中国人社宅が13954.22坪である。両方の社宅を合計すると、その延坪数は21845.77坪である。

日本人社員用の内外綿宜昌路社宅は1911年に操業を開始した最も古い第三工場に隣接しており、工場と同時期に建設された。レンガと木材の混構造による2階建ての社宅であり、2階部分に三角形のバルコニーが設けられている。社宅の周りに緑地を作り、歩道には街灯を設置し、稲荷神社を設け、桜の木を植えた。夏には緑地で映画上映を行っていた。<sup>(11)</sup>社宅分布図より判読すると、29棟の建物が建設されている。住宅のタイプは5つの型が建設され、職階に応じて面積や設備が異なる。

また本部に隣接する2地区の社宅は7棟と3棟、両方で10棟である。当時の写真と現地調査によれば、1、2階ともバルコニーをもつ典型的なコロニアルスタイルの立派なレンガ造2階建ての集合住宅である。

中国人用の社宅は内外綿では上海進出後間もない1913年ごろから建設が既に始まっている。建設の主旨は職工の転職を防止し、かつ既婚者が主で自宅から遠路通勤する職工が多かったので、工場近くに低価格で定住させることが労働力の確保につながると考えたためである。<sup>(12)</sup>

中国人社宅は工場地域にも、日本人社宅にも隣接せず、工場周辺にそれぞれ独立して位置している。第一・二工場地域の周辺に櫻華北里（31棟2階建て、2732.86坪、延床5145.72坪）、櫻華南里（26棟2階建て、2541.48坪、延床4787.96坪）、梅芳里（33棟、2125.44坪、延床4003.88坪）、東瀛里（12棟、565.7坪、延床946.64坪、江畔里（4棟、不明、不明）の

5カ所、少し離れて大旭北里（4棟、177.76坪、延床333.52坪）、大旭南里（26棟2階建て、1169.64坪、延床2146.31坪）、の2カ所、第五～八工場地域近くの東京里（20棟、1241.11坪、延床2291.16坪）、それに第九工場地域付近の錦繡里（29棟2階建て、1776.74坪、延3348.47坪）と、それぞれの工場敷地に近接して合計9カ所の中国人専用の社宅がある。

社宅分布図より判断するに、江畔里と東京里以外は中央通路をはさんで両側に棟割り長屋が短冊形に並ぶ「リーロン里弄住宅」である。資料によれば、2階建て家屋が約1400戸、平屋建てが約500軒との報告と、東京里には「中国式人字形気窗青瓦平房」が175間と、共同便所・店舗を有していたとの記録がある。

両側に短冊形の里弄住宅が長く建ち並ぶ当時の写真「上海支店華工社宅の一部」は、広い道路幅員、途中に横道があり、右奥に7棟が建っていることから判断するに、櫻華北里を北に向かって撮った写真である。道路には電柱が立ち、中央を走る広い道路には両側に上海特有の2階建て庫門式里弄住宅が並ぶ。たくさんの人々が行き交い、当時の中国人社宅内の風景をよく伝えている。

社宅の構造については「大抵棟割長屋で間口五間奥行五間、台所、物干しベランダ付二階のもので、日本内地に比較して数等上である」との報告があるが、建設時の図面が入手できていないため現在の段階では確認できていない。ただし、錦繡里と大旭南里の現存調査によれば、当時建設された内外綿の中国人用社宅は間口5間はない。また平面も中国的な里弄形式ではなく、日本の長屋を折衷した住宅であることが判明している。現存する錦繡里と大旭南里の現地調査によれば、その短冊形の里弄住宅群の周囲は高い塀で囲まれている。この他社宅に付属する施設としては「いずれの社宅にも一般店舗へ間貸しが行われており、東京里以外でも居住者の多い櫻華里や梅芳里には、小売商店がいくつか同居していた」というように、社宅の一部分に店舗が入っていたことが判明している<sup>(14)</sup>。

次に福利施設について検討すると、各工場内には社員並びにその家族のために購買会を置き、華人工員の為に売店を設け、それぞれ必需品を廉売してい

た。特に上海支店の購買会はその規模が最大であって、日用品を多数常備して小デパートの観があり、注文取りから配達にまで便宜を図っていた。その他に食堂、哺乳所、診療所が工場内に付属施設として設けられていたことが芦沢論文によって詳細に報告されている<sup>(15)</sup>。工場の外に設けられた福利施設として、場所が判明しているものでは第一・二工場に隣接して水月花園と呼ばれる大きな公園がある。水月の名称は商標に因んで命名されている。水月花園は6600坪の広さをもち、百有余本の大和桜が移植され、芝生に覆われている。家族連れの日行楽の場所であり、園内には野球グラウンドと6面のテニスコートがある。またその中には「その結構広壯設備亦華麗であって、花園に好点景を添えている」3階建ての合宿所と、茶亭、弓場がある。この他に柔剣道場が用意されていたが、位置は不明である。

本部敷地の道をはさんだ隣横には従業員の懇親、修養、慰安に資するための水月倶楽部厚德館がある。上海事変や騒擾の際には海軍陸戦隊が置かれ、地方治安維持の本拠の役割も果たした。

第五～八工場横には社員及びその家族の療養に配慮して水月医院が設けられていた。また工員の応急の医療手当てから伝染病予防のために水月華工診療所が用意されていたが、位置は不明である。

教育施設としては社員の児童のために水月幼稚園を設け、中国工人職員の子弟のために学堂を置いた。華童学堂は、中国人教師によって小学教育を施している。なお、中国人工員のために華人補習学校、華人日語学校を設置し、前者は簡易な技術的教育を授け、後者は日本語を教えているが、これも施設の位置は不明である。また、日本人社員の児童用に当初は水月小学校を運営し、教師も内地より招聘していた。その後1927年に内外綿が出資して西部日本小学校が設立され、内外綿従業員の子弟や日華紡、豊田紡、同興紡、東亜紡など、他の日系紡績会社社員の子弟も通学していた。その位置は胶州路601号である<sup>(16)</sup>。

また1926年、普陀地区の中央にあたる小沙渡路と勞勃生路が交差するロータリに内外綿の創始者、川邨利兵衛が時計塔を建てた。この川邨時計塔は土



台は石で方形、高さ4丈余りの塔で頭頂部には時計がはめ込まれ、15分に1度時を告げることから中国人からは「大自鳴鐘」と呼ばれていた。

この他水月医院横の普陀路交差点には警察署があり、1932年には宜昌路に消防署も建築され、その高い火の見櫓は川郵時計塔とともに普陀地区の広告塔として当時から大きな話題を呼んだ。

以上のように蘇州河一帯の内外綿の工場社宅建設は、往時の資料をして、「内外綿の敷地の広さは、あたかも町のような<sup>(17)</sup>」と言わしめるほど巨大であり、そこに工場、事務所、住宅、公園、時計塔、消防署、医療と保健衛生のための病院、倶楽部、教育・修養、運動、慰安娯楽、その他の福利施設を建設した。都市のインフラ施設は工部局によって計画建設されるなかでの制約つきであったために、規模としては日本人社員世帯と中国人工員約2000世帯を対象とした町ないし都市スケールのニュータウン事業であったが、その計画内容は各施設を有機的に配置して密度あるまちを構成することとはほど遠く、工場周辺にそれぞれ孤立した村々が無関係に散在して、村落が出来上がっていた。しかしながら、租界の中心部で銀行やホテル、マンションといった近代建築が次々建設されている同時期に、租界の北の端で並行してこうした一大村落の建設が一企業によって行われたことには大いに留意する必要がある。

### (3) 社宅の居住空間

20世紀に入ると日本では社宅が普及してくる。それは職工家族の保護、職工移動の抑制、熟練工の養成などの点で効果的であり、職工の住居としては寄宿舎よりも適していると、方針が変わった結果である。<sup>(18)</sup> 在華紡においても職工社宅の評価は同様であった。ただし上海においては内外綿でみてきたように、原則日本人用と中国人用に社宅が分かれていたことが大きな特徴である。日本人用社宅は技術者や経営に係る社員用の住宅であり、中国人用社宅は職工専用の住宅である。

入手した計画建設当時の図面と、現地調査によって作成した復元図面から判明している9事例の配置図をとりあげ、その9事例を中国人職工社宅と日本

人社員社宅に分類してみると、その内訳は中国人職工社宅が4例、日本人社員社宅が3例、さらに日本人中国人の社宅が隣接する事例が2例である。ここでは中国人、日本人、中日併存の3つのグループに事例を分け、それぞれの社宅の敷地、配置、住居、付属の福利施設について分析し、中国人社宅、日本人社宅、中日併存社宅のそれぞれの特徴を考察する。ここで扱う事例は全て東の楊樹浦地域に位置している。その位置図と各々の図面はデータシートとして、巻末に添付しておく。

#### (3) - a 中国人職工社宅

(データシート5 (p.37))

1939年の佐藤武夫の論文<sup>(19)</sup>によれば、都市の近代化と共に「<sup>リ-ロン</sup>里弄住宅」と呼称される棟割り式の集合式住宅が租界の中に多数建設され、密集する市街地を形成したことが報告されている。ここで里弄について言及しておけば、道路で囲まれた1つの街区を里と呼ぶ。周囲は商店街か、塀が囲み、なかに棟割り集合式住宅が配置される。街区内に入り出すためにパッサージ風に穴があき、鉄扉が設けられる。車が通行しない街区の内側の路地を弄とよぶ。その弄に接して棟割り式の集合式住宅が短冊型の高い住戸密度で配置される。収集した在華紡の中国人社宅もすべてこの里弄住宅である。

現在判明している4事例はすべて上海紡織上海工場社宅の配置図である。その建設年代は不明であるが、工場の操業時期から考えて1900年前後からである。楊州路・龍江路工人社宅、河間路工人社宅、福寧路工人社宅、錦州路工人社宅の順に取り上げ、それぞれの敷地、配置、住居、その他の付属福利施設について分析する。

##### a-1 上海紡織上海工場楊州路・龍江路職工社宅

(データシート6 (p.38))

塩山路を挟んで2敷地が面する。2面が道路に接する1列配置。両敷地とも後ろはクリーク。社宅は専用住宅地で、道をはさんで2区画からなる。全体戸数は15棟111戸2階建てである。楊州路地域は社宅8棟64戸、龍江路は7棟47戸である。住宅の形式は里弄住宅であり、福利施設は別棟で設けることな

く、社宅の2戸分をそれぞれ事務所と医局に割りあてている。周囲全体を塀で囲む。出入り口は各区画それぞれ2カ所ずつある。建坪は1069.77坪、延坪は2130.12坪である。

#### a-2 上海紡織上海工場河間路職工社宅

(データシート7 (p.39))

敷地は河間路、三新路、錦州路の3つの道路に接する角地に位置する。敷地形状は長方形で周囲を塀が囲み、短辺にそれぞれ1カ所門が設置されている。敷地中央に幅広の通路が走り、両側に直角に2階建て棟割り長屋が配列された里弄住宅である。社宅は両側各々9棟ずつ、合わせて18棟、全て同一平面を持つ住宅82軒から構成されている。住戸配置は高密度である。社宅以外には事務所1棟が錦州路門横にあるのみで、便所も他の福利施設棟のみあたらな。建坪798.63坪、延坪1579.92坪である。

#### a-3 上海紡織上海工場福寧路職工社宅

(データシート8 (p.40))

敷地は福寧路と齊々哈爾路の交わる角地に位置する。中央に幅広の通路を設け、両側に2階建て棟割り長屋が直角に配列された典型的な中国都市長屋の配置である。社宅は両側各々8棟、合わせて16棟、全て同一型の住宅92軒からなる。正門のある福寧路に沿って福祉施設としての事務所兼門衛1棟、売店1棟、浴場1棟、便所1棟が配置され、さらに社宅一番奥にも便所が1棟配置されている。周囲は壁が周り、4カ所の出入り口が設けられている。建坪967.15坪、延坪1865.84坪で、日本人社宅に比較すると住戸密度は高い。本事例は、先の上海紡織上海工場河間路職工社宅同様、中央に通路を配した2列型の典型的な里弄住宅で、これに福利施設の建物を別棟として計画した社宅福利施設併存型の事例で、中国人社宅のなかでは最も高い居住環境を形成した事例である。

#### a-4 上海紡織上海工場錦州路職工社宅

(データシート9 (p.41))

2面道路に接し、一面はクリークに面する、出入り口2カ所。学校施設と2分した里弄住宅の1列配置型で5棟30軒の小さな社宅である。しかし社宅以外の建物として門衛1棟、浴場、学校、運動場、片

隅に廟がある。社宅と福利施設の間には仕切りが記入されていることより判断すると、この学校と廟は他の上海紡の中国人社宅の住人も共同利用したと考えられる。建坪は432.91坪、延坪は不明である。

全体を概観すると、中国人社宅は工場にも、日本人社宅にも隣接せず、工場周辺に孤立して位置する。敷地は長方形敷地で、敷地周囲を塀が囲み、出入り口が数カ所設けられている。多くは中央を走る幅広の通路両側に沿って短冊形に2列の長屋が建ち並ぶ里弄住宅である。住棟数は5～15棟、住戸数は30～111戸、建坪は432～1069坪である。判明している内外綿に比較すると住宅地の規模は小さい。福利施設は事務所、医局に社宅の一部を充てている事例から、売店、事務所、浴場、便所を別棟で設けた事例までである。また、錦州路社宅が、敷地の約半分を用いて浴場、学校、廟を揃えているのが目を引く。これは周辺の同社社宅の中国人も共同利用していると考えられる。

### (3) - b 日本人社員社宅

日本人社員社宅の事例は上海紡績の社宅3例である。建設年代は不明であるが、第一工場の操業開始を考慮すれば、1900年前後と判断できる。上海紡織楊樹浦路第一工場社宅、上海紡織上海工場齊々哈爾路社員社宅、上海紡織上海工場平涼路社宅の順に取り上げ、敷地、住居、その他の施設について分析する。

#### b-1 上海紡織楊樹浦路第一工場社宅

(データシート10 (p.42)、13 (p.45))

楊樹浦路に面する古くからの第一工場の社宅は敷地内に工場と併存している。構内南西角地部分に事務所及び合宿1棟、甲型1棟6戸、丙型2棟10戸があり、斉物浦路をはさんだ構外に丙型2棟8戸がある。構内外社宅の総数は5棟24戸である。建坪は416.27坪、延べ面積は783.68坪である。福利施設は浴場が倉庫に隣接して1棟、それに合宿所と事務所にそれぞれ食堂がある。敷地は四周が道路で、構内は工場と社宅が一体で塀で囲まれ、出入り口は8カ所である。工場と社宅の境界はない。全体の配置図

から判断すると、社宅は工場敷地内の倉庫や変電所の間隙や、あるいは道をはさんだ向かい側に建てられており、工場のスタート時より計画的に配置されたものではなく、工場の稼働に合わせて随時増築していった、工場と社宅が同一敷地内に併存する典型的な事例である。

### b-2 上海紡織上海工場齊々哈爾路社員社宅

(データシート11 (p.43)、16 (p.46))

工場からは独立した社宅専用地域である。敷地は齊々哈爾路と丹陽路の交わる角地に位置し、敷地周囲を塀が囲む。出入口は正門と他の2カ所の合計3カ所である。社宅数は7棟66戸2階建てであり、社宅のタイプは丙型1種類で他の型はない。10戸から構成された棟が6棟、6戸から構成された棟が1棟である。福利施設は浴場のみが別建物で北西角に配置され、他の売店、倶楽部、医局、隔離室は正門横の規格社宅のうちの5戸分を充てている。つまり浴場以外は社宅を代用する社宅福利施設兼用型である。正門を入った福利施設のある棟の前には小さな広場がある。建坪は892.15坪、延坪は不明。

### b-3 上海紡織上海工場平涼路社宅

(データシート12 (p.44)、14 (p.45)、15～16 (p.46))

上海紡織上海工場平涼路社宅は、配置図及び各社宅平面図が全てそろっており、当時の日本人社宅の状況がよく把握できる。敷地は平涼路、臨青路、クリークが流れる錦州路、良郷路の道路に四周を囲まれたほぼ矩形の形状である。この敷地の中に2階建て社宅22棟144戸が配置されている。社宅のタイプは乙社宅、新丙型、従来丙型の3種類である。その内訳は乙型1棟6戸、新丙型12棟68戸、従来丙型9棟70戸である。建物の配置は南北向き20棟、東西向き2棟である。広い乙型棟が正門前の敷地中央に位置する。社宅の他に、福利施設として中央正門わきに購買1棟、北側奥中央に倶楽部1棟と浴場1棟が隣り合って位置する。また南西角には病室を持つ医局棟があり、西北角には洗場棟が置かれている。敷地の周囲全体には塀がまわり、出入口が3カ所設けられている。建坪は2055.23坪、延坪は不明である。

乙型社宅は2戸1棟形式のレンガ木造の混構造2

階建てである。平面は片廊下式で、1階は玄関を兼ねたバルコニー、ホール階段室、居間、食堂、炊事場、化粧室WCの5室から構成され、2階は居室が4室で、そのうちの3室には寝室の表示がある。南側にはバルコニーが付属する。外観の様式はコロニアルスタイルである。1階は椅子式であるが、2階の最も大きな寝室はトコ、オシイレの記入があり、畳の部屋である。生活様式は和洋の折衷式で計画されている。

従来型社宅はレンガと木の混構造による2階建て長屋形式である。短い棟は6戸、長い棟は10戸から構成されている。平面は片廊下式で、1階はエントランスを兼ねた南バルコニー、廊下階段室、居室2部屋(居間6畳、茶の間3畳)、炊事場、WC、裏勝手口から構成され、2階は居室が2部屋(8畳客間、6畳寝室)に南縁側がつく。1階のトイレ部分のみが平屋で、他は総2階である。1、2階4居室とも畳敷きの和室であり、生活は全て和式スタイルとなっている。

新型社宅もレンガと木の混構造による2階建て長屋形式である。4戸型と6戸型がある。平面は片廊下式で、1階は玄関、廊下階段室、居室2部屋(居間6畳、茶の間4.5畳)、炊事場、WC、裏勝手口から構成され、2階は居室が2部屋(8畳客間、6畳寝室)に、南縁側がつく。1、2階の形が等しい完全な総2階である。1、2階4居室とも畳敷きの和室であり、生活は全て和式スタイルを採る。

以上150軒ほどの規模の日本人社宅の概要がよく把握できる。社宅は数と規模に合わせて、予め計画されている型のうちから3タイプが選択される。またプログラムが概略決まると敷地にあわせて配置計画が行われ、その社宅の数や設備内容に従って必要な福利施設が用意されている。敷地全体は塀で囲み、必要に応じて出入口を設けている。社宅は工場と分離されているが、必要な福利施設は敷地内に準備されており、日常生活はこの囲われた塀の中で可能となっている。

日本人用社宅は工場の敷地内に社宅が混在する工場社宅併存型と、工場から社宅が完全に分離した社

宅独立型に分けられる。また社宅独立型も福利施設の扱い方で、住宅の一部を福利施設として利用する住宅福利施設兼用型と、住宅とは別に福利施設を独立に用意した住宅福利施設併設型に分かれる。

福利施設は、購買棟、倶楽部棟と、浴場棟、病室を持つ医局棟、洗場棟が置かれ水準が高い。

ここで挙げられている社宅は1900年代に海外で生活した日本人の居住環境とその計画手法である型計画、福利施設の計画、一団の集団住宅地計画の事例を具体的に理解する上で貴重である。また建設された住宅は、1、2階にそれぞれベランダをもつコロニアルスタイルの外観が目目を引く。生活は1階が椅子・テーブルの洋式、2階が畳の和洋折衷様式の型と、1、2階とも和式の型の2通りが見受けられる。

### (3) - c 日本人中国人隣接型社宅

日本人と中国人の社宅が隣接し合う公大紡績楊樹浦路社宅と裕豊紡績の社宅の2事例を取り上げる。

#### c-1 公大紡績楊樹浦路社宅

(データシート18 (p.49)、19 (p.50))

鐘淵公大紡績会社は、1911年に上海絹絲紡績株式会社と鐘淵紡績会社が合併してできた会社で、上海には4つの工場がある。東西紡績地域にそれぞれ2カ所ずつ立地している。東地域では、1922年に公大第一廠（平涼路2767号）が竣工し、続いて1925年に楊樹浦路にあった英国人経営の上海老公茂紗廠を買収して、公大第二廠が稼働する。また西地域においては、1911年合併時の蘇州河地区の絹絲紡績工場が後に公大第三廠と呼ばれる古い工場がある。また1931年にその第三廠敷地内に公大第四工場も稼働する。その他公大第一廠に並行して、1922年に青島に鐘淵紗廠（後の公大第五廠）を建設着工した。1920年代以降鐘紡は上海、青島、天津などに、紡績業を主体とした日系企業としては中国最大の紡績工場を建設して、その従業員数は1万人に及んだ。

現在、上海の各々の工場に付属した社宅及びその福利施設群についての計画建設時の図面は入手されていないが、第二廠に近接する公大紡績楊樹浦路社宅の現存が確認され、現況調査と聞き取り調査によってその一部の復元図面を作成している。そこで楊

樹浦路社宅を中心にして、他の写真、絵葉書、その他の資料及び青島の第五廠の戦前の図面と現存調査を併せて、居住環境の考察を行うこととする。

第二廠は既存工場を買収してできたためにその社宅である楊樹浦路社宅は、第一廠や第五廠の社宅のように工場一体型ではない。周囲を楊州路、許昌路、楊樹浦路、通北路に囲まれた菱形の地形である。敷地を二等分して東側が日本人、西側が中国人、2つの社宅群が同一敷地内に隣接し合い、周囲を高い塀が取り囲む。

1920年代に建設された楊樹浦路社宅の社宅は、3階建ての支店長宅とレンガ+木造の日本式2階建ての、タイプの異なる住宅75棟からなる。このうちの約半数が日本人用、残りが中国人用住宅である。以前の状況はわからないが、両社宅の間は現在高い塀で遮られ、行き来できない。日本人住宅は規模の異なる数種の型が建設されている。1、2階にバルコニーを設けたコロニアル様式と、バルコニーを持たない様式の2通りの和洋折衷の外観がある。庭の周囲は絵葉書によれば風を通す軽い板塀で囲われていた。現存調査によれば内部は片廊下平面の畳室を基本とした和式である。中国人の社宅は2階建ての石庫式里弄住宅で、密度が高い。これも絵葉書の内部写真によれば起居室は土足に椅子の中国伝統の生活様式を採用している。

配置を概観すれば工場に近い東北に正門が位置する。正門入り口にロータリーが設けられ、その奥に支店長の住宅3階建てが位置する。その隣の現在7階建てのアパートが建つところにはかつてテニスコートがあり、その東隣の現在小学校のある場所には公園が設けられていた。テニスコートの北隣は現在も2階建て幼稚園がそのまま存続している。中央東側には2階建ての病院があったが、建物は多少増築して今は住宅として使っている。日本人社宅の北の地域にも公園があり、当時はその一角に神社もあったが、現在は建物が増改築された。公園の面積は建設時の3分の1ほどに減少している。目を引くのは東端に25mプールが現存することである。当時ここにプールが設けられていたことに驚くが、今も子供たちが盛んに利用していて、当時の日本人社員の

生活の進んだ一面を連想することができる。

一敷地内にある西地域の中国人社宅の詳細な配置は現在の段階では不明であるが、里弄住宅が多数現存している。その南西の位置に里弄住宅以外の病院らしき他の施設があるのが目を引く。

ちなみに青島の現在判明している日本人と中国人社宅が隣接する社宅図面から各福利施設をここにあげれば、まず中国人社宅地域には遊園地、遊園地の一部に神社と境内、貯水池、テニスコート、倶楽部、茶室、浴場、売店、理髪所、図書館、売店、次に中国人社宅には茶館、浴場、便所、その他に工場と社宅の間に病院、病棟舎、宿舎、食堂、合宿所、女子合宿所、温室、塀の外には公園、球場がある。また他の資料として「No.1 Cotton Mill, Kung Dah」のタイトル<sup>(20)</sup>のつく公大第一廠を紹介したPOST CARD 28枚のうちから社宅と福利施設に関するカードをここに上げれば、「網球場、中国人工房、工房、医院、花園、花園内稲荷神社、遊園地、中国人食堂、小学校及び補習学校、倶楽部其日園、花園内其日亭及水池、中国人住宅内景、中国人礼拝堂」と多数紹介されている。

これをみると、1920年代の公大の社宅の建設は単なる宿泊施設の計画ではなく、工場と一体となった塀の中に囲まれた密度ある一団の集団住宅地の計画であったことが認められる。日本人と中国人の社宅を隣接させた住居施設を配置するとともに、生活に必要な病院施設、教育施設、宗教施設、娯楽施設、運動施設の充実したコミュニティと福利厚生施設を備えた計画は労使問題や労働運動への対応を兼ね合わせながらも、住人に配慮した質の高い内容である。第二、第三、第四廠は既成の工場を買収して企業展開をしたために工場と一体となった工場村は実現できなかったが、第一廠と第五廠は、兵庫同様に工場と社宅群が一体となった工場村の建設が可能であった。

こうした公大の水準の高い居住環境づくりは、鐘紡の経営者武藤山治の経営理念とスタンスを表現している。武藤山治（1867～1934）は米国より帰国した翌年の1894年に鐘紡に入社し、同じく米国帰りの建築家平野勇造と組んで家族主義の理念のもと

に、労使一体型の福利厚生施設を充実させた兵庫工場を完成させ、その経験を以て中国における工場においても同様に、日本人と中国人を一団とする住宅地を計画建設し、生活環境の充実を図るとともに、家族的なコミュニティを持たせることを意図した。また、こうした公大の高い塀で囲いこんだ集団住宅地は、すべての用件を中で満たすことができ、労務管理の上からもすこぶ都合がよかった。

### c-2 裕豊紡績楊樹浦路社宅

（データシート20〈p.51〉、21〈p.52〉）

工場の位置は東地区黄浦江に沿い、上海碼頭に近い良い立地条件を備えている。1932年作成の地図に裕豊社宅、裕豊紗廠の記入があることを確認できるが、社宅の建設年代は不明である。ただし、工場の操業時期から1920年代前半と考えられる。

工場敷地は全体で6万余坪で、工場と社宅は道路をはさんで近接する。元ポイントホテルを買収して倶楽部とし、これを中心として住宅地をつくっている<sup>(21)</sup>。

設計者は現存住宅の意匠から平野勇造と推察されるが、確定する資料はない。建設時の図面がないため、現地調査と衛星写真、それに地図を用いて当時の配置図を復元した。一角に位置するはずの中国人社宅は現在不明である。建設時の日本人用住宅数は16棟84戸であり、その内訳を規模別にみるとA型1棟1住戸、B型4棟8住戸、C型3棟11住戸、D型3棟24住戸、E型5棟40住戸である。構造は木とレンガの混構造で最も大きなA型が3階建てであったが、他は全て2階建てである。敷地周囲は高い塀で囲われている。出入り口は1カ所である。住居の他、敷地東側には現在サッカー場があるが、以前ここは子供の遊び場と集会場所に使われていたとのことである。現存調査ではその他の福祉施設の存在については確認できていない。

しかし会社資料によれば、「従業員は社員六十名のほか、男工九百二十六人、女工三千百六十六人、計四千百五十二人であった。中国人職工に対する福利施設は大体内地同様であったが、華人社宅は別に一郭をなし、煉瓦造の二階建及び三階建五十棟を有し、戸数五百、居住工人男子約六百人、女子約二千

人、その家族一千七百人が社宅係監督のもとに居住していた。社宅の中央に倶楽部を設け、その広い前庭の周囲に事務所・廟・診療所・浴場・及び店舗を設け生活の便に供し、宗教心の滋養に努め、冠婚葬祭のためには倶楽部を無償で貸与した。別に華工児童のために裕豊小学校を設立して基礎教育を施し、一般華工人には裕豊補習校を開設して算用数字・日本仮名文字・作業用語・心得・簡易作法等の補習教育を興えていた。尚、随時映画又は芝居の夕や運動会を催して慰安に努めていた」居住環境の充実した内容を知ることができる。<sup>(22)</sup>

中国人と日本人の社宅の併存、及び福利施設の充実とは同時期に建設された公大社宅に類似している。

## おわりに

在華紡の居住環境について具体的な事例の検討を行ってきたが、その特徴をまとめると以下の通りである。

上海の在華紡は租界の郊外に位置する東の楊樹浦地域と西の普陀地域の2地域にまとまって展開した。上海紡績は1900年前後から東の楊樹浦地域に多数の工場を建設し、それぞれその周囲に社宅を設けたが、相互の関連性に欠けていた。1910年代になると内外綿が西の普陀地域一帯に一大村落を建設した。広い地域に社宅をはじめ様々な福利施設を多数建設したが、全体の計画性に欠け、まとまりのないまちづくりであることは否めなかった。1920年代前半にスタートした鐘淵公大は武藤山治の家族主義の経営理念を租界に持ち込み、楊樹浦地域のはずれに兵庫で実現した工場と付属施設が共存する計画性の高い工場村を建設した。また工場敷地外に社宅がある場合も、積極的に日本人と中国人の社宅を隣接させ、高い塀の中に福利施設の充実した一団の住宅地を建設した。これは同時期に建設された裕豊紡績の社宅も同様であった。建築計画史からみれば、1920年代前半に上海の租界とその周辺地区に日本の手によって管理、教育、医療、衛生、運動等の充実した福利厚生施設をそなえた密度の高い社宅が一団の集団住宅地の手法によって建設されたことは極

めて重要なことである。社宅は防備と管理のために高い塀で囲われ、それぞれが閉じた住宅群であった。その原因は1925年に勃発した五・三〇事件の後「工場における壇壁門戸等出来るだけ其防備を堅固にするは勿論自家職工の合宿所或は住宅等に於ても可成集合主義を執り他会社職工又は無頼の徒の混入雑居を避けしむるの策を執る可し」という方針がとられたためである。<sup>(23)</sup>

中国人の社宅と日本人の社宅は、一般的には別々に計画された。中国人住宅は新しく生まれた空地の少ない棟割り長屋形式の里弄住宅である。平面は和洋折衷様式である。日本人住宅は予め規模別に準備された規格住宅のなかから型を選んで計画する型計画の手法が採られた。その規格住宅は低層集合形式で、外観は1、2階にベランダのつくコロニアルスタイル、内部は和洋折衷式の生活様式が多い。

在華紡の建築を考える上で上海に在住した建築家平野勇造（1864～1951）の存在を欠かすことはできない。1894年米国から帰国後すぐに武藤山治の依頼で鐘淵兵庫工場を設計し、また1896年上海紡績の設計顧問として上海の現地調査にも参加している。その後1899年に三井物産支店長として上海にわたり、独立後、領事館や日本人学校等積極的な設計活動を展開する。その間の1909年に、内外綿の最初の工場及び付属施設の依頼を受けて設計を行っている。またその後につくられた公大及び裕豊の施設も、現存する社宅を検討するかぎり平野勇造のデザイン要素が数多く認められ、在華紡の建築を検討していく上でのキーパーソンである。

今後の研究課題として、事例対象地域を上海のみでなく青島、天津に展開し、比較考察を行いながら内容を深めることが重要と考える。

## 調査・執筆分担

現地調査にあたっては、主に大里が聞き取り、主に富井が現存・現況記録・写真撮影を行った。

本稿執筆にあたっては、本文の「はじめに」は大里・富井、Ⅰは大里、Ⅱと「おわりに」は富井が執筆した。また事例のデータシートは富井指導のもと、神奈川大学工学研究科建築学専攻博士前期課程在籍

の千葉神奈子が作成した。

【謝辞】

本論をまとめるにあたって中国の東華大学人文学院陳祖恩教授、同済大学建築与城市规划学院張尚武教授、武漢理工大学建築学科李百浩教授に現地でも

大な調査協力をいただいた。また、東京大学大学院人文社会系研究科博士課程在籍の芦沢知絵氏からは貴重な図面の提供を受けた。ここに記して、深甚の謝意を表する次第である。

(おおさと・ひろあき / とみい・まさのり)

【注】

- (1) 日本綿業倶楽部、『内外綿業年鑑』昭和17(1942)年版、昭和18(1943)年12月
- (2) 桑原哲也、「日清戦争直後の日本紡績業の直接投資計画—中上川彦次郎と上海紡績会社—」、『経済経営論叢』第15巻1-2号、京都産業大学、昭和59(1984)年
- (3)、(4) 陳祖恩、『尋訪東洋人—近代上海的日本居留民』、上海社会科学院出版社、2007年1月
- (5) 内外綿株式会社、「満州及支那における当社の地位」、『内外綿株式会社五十年史』統計p.13、1937年9月
- (6) 内外綿株式会社、前掲書、pp.49、178、179 年表
- (7)、(8) 内外綿株式会社、前掲書、統計p.6「当社各支店工場雇用人員」(昭和12年上期末現在)
- (9) 芦沢知絵、「在華紡の福利施設—内外綿上海工場の事例を手がかりとして—」、『中国研究論叢』第7号 p.27、2007年8月
- (10) 内外綿株式会社、前掲書、p.133
- (11) 陳祖恩、「上海・旧日本建築探検」、『上海MY CITY』2003年第10期p.36
- (12)、(13)、(14)、(15) 芦沢知絵、前掲論文
- (16) 内外綿株式会社、前掲書、p.139
- (17) 陳祖恩、前掲「上海・旧日本建築探検」p.36
- (18) 千本暁子、「20世紀初頭における紡績業の寄宿女工と社宅制度の導入」、『阪南論集 社会科学編』Vol.34 No.3、1999年1月
- (19) 佐藤武夫、武基雄、「中支に於ける邦人住宅事情」、『建築学会論文集』第30号 p.182-188、1943年9月
- (20) 朝日新聞大阪本社富士倉庫、「上海F012-18政治」公大POST CARD 28枚 COPY、公大紗廠(鐘紡支店)
- (21) 東洋紡績株式会社、『東洋紡績七十年史』 p.88、昭和28年5月
- (22) 東洋紡績株式会社、前掲書、p.395
- (23) 「在支内外人経営工場ニ於ケル労働者待遇関係雑件」(外交史料館史料3、7、2、10) 商第299号「支那ニ於ケル邦人経営ノ同盟罷工ニ関スル件」(1925.8. 19付)

【参考文献】

- 内外綿株式会社 1937 『内外綿株式会社五十年史』  
 日本綿業倶楽部 1942 『内外綿業年鑑(昭和17年版)』  
 東洋紡績株式会社 1953 『東洋紡績七十年史』  
 鐘紡株式会社 1988 『鐘紡百年史』  
 木ノ内誠編著 1999 『上海歴史ガイドマップ』大修館書店  
 朝日新聞大阪本社富士倉庫所蔵 「上海F012-18政治」公大POST CARD28枚 COPY、公大紗廠(鐘紡支店)  
 佐藤武夫・武基雄 1942 「北支に於ける邦人住宅の実例」『建築学会論文集』第28号  
 佐藤武夫・武基雄 1942 「北支に於ける邦人住宅の現状」『建築学会論文集』第28号  
 佐藤武夫・武基雄 1943 「近代支那住宅散見」『建築学会論文集』第29号  
 佐藤武夫・武基雄 1943 「中支に於ける邦人住宅事情」『建築学会論文集』第30号  
 桑原哲也 1975 「戦前における日本紡績業の海外活動—鐘淵紡績会社の事例を中心として—」『六甲台論集』第22巻1号  
 桑原哲也 1979 「日清戦争直後の日本紡績業の直接投資計画—中上川彦次郎と上海紡績会社—」『経済経営論叢』第15巻1・2号、京都産業大学  
 桑原哲也 1984 「日清戦争直後の日本紡績業の直接投資計画—東華紡績会社の事例を中心として—」『経済経営論叢』第14巻2号、京都産業大学  
 千本暁子 1999 「20世紀初頭における紡績業の寄宿女工と社宅制度の導入」『阪南論集 社会科学編』Vol.34 No.3  
 丸山信彦・藤谷陽悦 2000 「鐘ヶ淵紡績・兵庫工場の福利厚生に関する一考察」『日本建築学会大会学術講演梗概集』F-2 建築歴史・意匠  
 芦沢知絵 2007 「在華紡の福利施設—内外綿上海工場の事例を手がかりとして—」『中国研究論叢』第7号